

海外メンタルヘルスの現場からⅡ

(35) 駐妻 (続)

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

前回、駐在員の奥様で、日本では働いていたけれども、夫の海外赴任に伴って仕事をやめて帯同しているというケースについて少し書きました。今回はそこにもう少し付け加えたいと思います。妻の日本国内での働き方は正社員だったり、派遣職員だったり、パート勤務だったりと色々ですが、いずれにしても、共働き家庭が増えている昨今の日本の状況から、仕事を辞めて夫の海外赴任に帯同して来たという奥様が以前よりも増えてきているように思われます。

日本での働き方がどんな形であったとしても、これまでの仕事をやめて完全に専業主婦になるということは、女性にとって大きな人生の変化となります。そして、そこにはさまざまな苦悩が生まれます。日中の時間がぽっかり空いてしまう、習い事や奥様仲間とのランチに興じることに仕事ほどの興味や意義を見出せない、誰にも必要とされていない・誰の役にも立っていないことがむなしい、夫に養ってもらっているという後ろめたさ、自由にお金を使えない不自由さ等々、悩みは尽きません。また、元から専業主婦の人たちとは話が合わないと感じたり、自分が日本ではワーキングウーマンだったことも言いづらかったりしますので、同じ境遇の人と共感し合えるチャンスに恵まれず、孤独感に陥っている人もいます。それなら、海外でもまた働けばいいと言う声も聞こえますが、駐妻という立場での色々な制限や言葉の問題、これまでのスキルを生かせる職が必ずしもあるわけではないこと等、海外での就職はそんなに簡単ではありません。本人も働きたいと思っただけではいるがすぐに見つかるわけでもなく、夫からも「早く働け」と強くプッシュされるのがとてもストレスという方もいらっしゃいます。とにかく、自分のしたいようにできないもどかしさ、辛さは多大なるものです。これらの悩みが心身不調をもたらすことにもつながるため、駐在の奥様が仕事を辞めて赴任に帯同することが増えているということは、駐妻の心身不調の問題が増えているということでもあります。

職場でそれなりに出世してきたり、職業上のスキルアップに自信と誇りを持ってきた女性にとって、仕事を辞めることは人生の大事なものを失うこと、あきらめることとほぼイコールです。日本では中高年女性の求職は厳しいという現実があり、いつか日本に戻っても再就職はもう無理だろうとほとんどあきらめている人もいます。大きな喪失感、絶望感から、うつ状態に至る人もいます。あるいは、選り好みしなければ再就職は何とかできるかもしれないと考えている人や、1-2年間の休職手続きをして来ている人の場合でも、仕事に長いブラン

クができてしまうことや、仕事に復帰したときに時代についていけるだろうか、皆に迷惑をかけるのではないかと不安にさいなまれている人もいます。

実は、日本の仕事を辞める時点では仕事にもうそれほど未練はなかったという奥様もたくさんいらっしゃいます。むしろ、夫の駐在に帯同するという大義名分で堂々とやめられるのでよかったとか、仕事に疲れていた、あるいは体調不良があった、あるいはマンネリ化していた等々の理由で、いったんしばらく休養を取りたかったから海外への帯同はちょうどよかったという方もいらっしゃいます。しかし、そういう奥様方が願った通りにシンガポールで専業主婦となって皆ハッピーになっているかということ、どうも全員がそうというわけではなさそうです。仕事をやめて初めて、自分は本当は働いているほうが合っていた、働いていない自分は自分らしくないとわかった、社会と接点がなくなったことがこんなに辛いとは思わなかったと話す人が少なからずいらっしゃるからです。失って初めて失ったものの大切さがわかるということが当てはまるようです。

かつては駐在員の妻と言えば、まさに海外で奮闘する夫を全力で支える専業主婦中の専業主婦、日本国内における専業主婦よりも、より専業主婦らしさを夫からも会社からも要請されていたイメージでした。それもあってか、今も駐妻が海外で就職することを禁じている日系の会社がたくさんあり、海外で働けそうな職場があるのに働くことができず、落胆している奥様がたくさんいらっしゃいます。会社は、奥様達の立場や人生観が時代の移り変わりによってすでに変化してきていることを考え直す時なのかもしれません。